

書評

Serge Tixa 著/奈良 勲 監訳
触診解剖アトラス 下肢
黒澤 和生 (国際医療福祉大学)

臨床での実務的な業務に役立つ有用な本

本書はスイスのオステオパシーローザンヌ校の Serge Tixa 教授が著された本を奈良勲先生が監訳した翻訳版である。Osteopathy(オステオパシー)とは、人体のホメオスタシスを増大し、自らの治癒力で病気を治していこうとする学問体系であり、手技による治療を主体とする療法である。徒手的治疗手技に関心のある方であれば、マッスルエナジーや筋膜リリースなどはオステオパシーの技術であるところであろう。

この本に書かれている内容の背後には、そうしたオステオパシーの治療上の必要性から、体表からの位置の確認だけにとどまらず、骨、筋、軟部組織などのそれぞれの組織の走行と触診の仕方を独自に積み重ねてきた歴史的な流れが息づいている。徒手的治疗に興味を持っている理学療法士や作業療法士だけではなく、広く医療関連職種の方々にも臨床の現場に置いて実務的な業務に役立てて欲しい一冊である。就職して間もない頃、整形外科医のバイブル Physical Examination of the Spine and Extremity の原書を手に入れたときに大変感動し、しばらく持ち歩いてきた記憶がある。この本は、そんな感動を覚えた一冊である。

豊富な写真と簡潔な触診法

228 ページより構成されたこの本は、385 枚の写真と 5 つの章 (股関節部、大腿部、膝関節周囲、下腿

部、足関節) に分けられ、それぞれが骨学、筋学 (筋、腱)、関節学 (関節および靭帯)、神経および血管の項目で構成されている。体表解剖学の成書や理学的所見の仕方に関する本では、これまで組織を体表から特定することが中心に説明されていたが、この本では軟部組織をどのように触診していくかが大変親切に書かれている。筋に対しては等尺性収縮により浮き上がらせ、靭帯、神経については伸張させる方向にストレスをかけるなど、基本的な触診の方法を一貫してわかりやすく写真を多用して示している。また、巻末の和文索引と欧文索引は、解剖学の履修や解剖学実習、触診の実習などで活用しやすいように工夫されている。

詳細な解剖学を学ぶことは、医療職にとって必須であるが、実際に体表から骨、筋、軟部組織などを触診するとなると非常に難しい。理学療法士にとっても触診は大変重要な技術であり、学生時代より系統的な学習を取り入れていくことが必要である。

本書は、理学療法士、作業療法士、あるいは医療従事者にとって実用的な書となるだけでなく、卒前教育の解剖学と臨床との架け橋となる触診解剖学の新たな始まりを予感させてくれる。続編の「触診解剖アトラス：頸部、体幹、上肢」の完成が待ち遠しい。

(B5 頁 228 4,800 円+税 2001 医学書院刊)